
フェイスレス・ロッキンロール

早苗月 槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェイスレス・ロッキンロール

【Nコード】

N9834G

【作者名】

早苗月 槐

【あらすじ】

ロックバンド「faithless」のライブを見た海裡みのりはそのバンドのギタリスト「レイン」に興味を持つ。そしてレインのいる高校に入り、その軽音楽部の門を叩くと……ベシストの少年のほのぼの(?)バンドストーリー。仕事と恋愛は分けません(?)。完結後の外伝も書いています。フェイスレス・アンコールロッキン共々よろしくお願いします。

prologue faithless

それは鮮烈な体験だった。

たまたま、従姉が出るからという理由から訪れたクラブハウス。

ポップスがメインだと言う中で異質のオーラを纏っていた。

照明を浴びて背中を見せている長い黒髪の長身。

スカートを履いているからには女性なのだろう。

その脇にはベースを持った影。

やがてその後ろにいるドラムスがスティックを打ち鳴らして4ビートを刻む。

かき鳴らされるギター。

漆黒のレスポール。

首筋に暖かい油を注がれたかのように甘美な痺れが走る。

歪んだサウンドがアンプから吐き出される。

ディレイがかかり、その一人だけのギターが何人ものサウンドを奏でる。

知らず体が動く。

そんな力が、それにはあった。

▽

演奏が終わった事には気づかなかった。

ただ最後にベーシストがバンド名を言ったことだけはかろうじて覚えている。

「フェイスレス」と。

1-1 RAIN

そして、春。

桜が咲く丘を歩く。

真新しい制服がちらほらと。

眩しく、暑い太陽を少し睨む。

丘に登るのは少々辛い。

こんな交通の便の悪い、しかも合格ラインちょっと上の高校を選んだのは他でもない。

フェイスレスがこの高校に居るのだ。

あのライブの後、フェイスレスの事を調べたのは言うまでも無い。入学から暫くして、今日は体験入部の始まる日。

あのようなレベルの高いバンドがしががない（というのも失礼だが）高校の一部活とは信じられないが確かに、軽音楽部とあったのだ。

ギターのソフトケースを担いだ真新しい制服の女子を追い抜く。

自分以外に軽音楽部に入ろうという人が居るものか、と思いつつ
少しだけ横目で見る。

黒い長髪、ハシバミ色の瞳。

白い顔は坂を上るのに必死で淡く色づいている。

視線に気付き顔を上げる少女。

何となく目を逸らして坂を上る。

桜も散った正門が見えてきた。

▽

放課後。

少し、遅くなってしまったがまだ軽音楽部は活動しているだろうか。

少し不安に思いつつドアの前に立つ。

なんとなく先輩から申し送られた腕章に触れる。

そう、なんだかんだしている内に（主にじゃんけん）生活委員、実質風紀委員にされてしまったのだ。

深呼吸を一度。ようやくドアに手を伸ばした瞬間。

ドアが開く。

最初に見えたのは、風になびく黒髪。

鳩尾に軽い衝撃。

一瞬呆気にとられて、下を見る。

白い顔があった。

鼻先が僅か赤いのはぶつかったからか。飛び上がって部屋の奥に走り去る女の子。

一瞬だったから分からなかったけど朝のギターケースの女の子じゃなかったか？

そして、部屋の奥ソファの上に足を組み、両手を翼のように背もたれに手をかけている影。

逆光。

けれどもあの長身は……

「まっていたよ」

そう、彼女は言った。

1-2

「一年三組の向坂海裡君だね」

そう言ったのは紛うことなくフェイスレスのギタリスト、レインだった。

一度収まっていた鼓動がまた高鳴り始め、耳元で叫ぶ。
「とうか待っていたとはどういう事なのだろうか。」

足が固まったかのように動かない自分に歩み寄るレイン。
自然に手をとられ、握手。

「楽器の経験は無いだろう？」

何故この人は矢継ぎ早に突拍子の無い事を言うのだろうか。

「その通りですが……その前にまっていたとはどういうことですか？」

ようやく言えたのはそれだけ。

レインは目を丸め首を傾げた。

横手から急に笑い声が上がった。

その声に驚いて横を向く。

ドラムセットに埋もれるようにショートカットの女子。

「レインの言い方は急すぎるんだよ」

ああ、そうだね。と一度目を伏せるレイン。

「君は私達のファンだろう？」

レインはにやりと笑った。

「何故……」

「何故知ってるかって？」

くすくすと笑いつつ片目を瞑ってみせる。

「反応をみていればわかるよ」

それに……と人差し指で額を軽く小突かれる。

「君の顔には見覚えがあるからね」

覚えていてくれた。

何だかよくわからない感情が胸に溢れ、顔が赤くなるのが分かった。

「入部希望……してくれるのだろうか？」

猛禽のような鋭い眼差しが、挟り込むように覗く。

こう聞かれて、首を横に振れる者が居るだろうか？

ただ僕は、首を縦に振った。

「これで、四人だ」

言ってレインはその場で一回転。

回って正面に戻った時には広げた両手の右にショートカットの女子、左手には後ろに隠れていた朝のギター女子の肩を抱いている。

ショートカットの女子は満更でもない様子だが、ギター女子はとても迷惑そうな顔。

ギター女子はこっちの視線に気付き赤面。

「フェイスレスは君を歓迎するよ」

頷くショートカット。

「じゃ、メンバー紹介」

こっちが、とショートカットの方を顎で指すレイン。

「ドラマーのミヤ」

みやはら たまき

「宮原珠希ミヤって呼んで。よろしくね」

ミヤは女子

にしては上背のある方で、下手したら自分と同じくらいの身長のあるレインと並んでもそう変わない身長。

茶色がかった髪をショートカットにし、真ん中で二つに分けている。

握手した手は思ったよりも固かった。

「んで、こっちがアヤ」

自分の後ろに隠れようとするギター女子を押し出しつつ、言うレイン。

「結城……綾ゆづき あやです」

夜闇のような漆黒の髪の少女は小柄で、その身長はレインの或いは自分の肩くらいかそれ以下しかない。

恥ずかしさに細められた瞳は、綺麗なヘイゼル。

「パートは、ギター」

そういったのはミヤ。

「そして、私がレイン。結城璃那^{ゆうきりな}」

長身で、鳥の羽のような髪をしたレインは、猛禽の眼差しで僕を見た。

ああ、璃那の文字を組み替えてレインなのか。と納得しかけ、少し違和感。

「結城……？」

「ああ、言ってなかったね。私とアヤは姉妹なんだ」

なるほど、言われてみればその漆黒の髪など共通点は見つけられなくも無い。

「そして、今から君が我がフェイスレスの一員」

三人の視点が集まる。

「ベースストの、カイリだ」

そう言って、彼女は可憐に笑った。

「さて、まずは私達の演奏を聞いてもらおうか」

レインはそう言うのと脇に立て掛けられたギターを取る。

漆黒のレスポール。

ミヤはドラマーの丸椅子に座り、スティックを取る。

そして、アヤはギターを出す。

深い青のムスタング。

マツチヘッドのそれは陽の光に綺麗に輝いていた。

ミヤがスティックを打ち鳴らす。

一拍の休符。

レインは笑みを深くし、

アヤは目を細めた。

そして走り出すギターリフ。

原曲ではユニゾンで重ねているギターを二本で贅沢に弾ききり、勢いを殺さず走り抜ける。

きらきらと光るムスタングの音にエフェクターで歪んだレスポールが絡み付く。

ともすれば際限なく早くなるギターを抑えるかのようなドラムのバスが歩調を刻む。

いいアレンジだ。

ギターが二本になった分音は厚みを増し、もともとベースとは思えないような音色をうまくカバーしている。

けれども、だ。

ドラムスが足を動かし、ギターが双腕を振るっても、そこに血液を通わせ、橋渡しするベースが居ないのだった。

このアレンジに最低限のベースサウンドを加えたらどうなるだろう。

背筋に甘い痺れが走り、足の力が抜ける。

このサウンドを支えるベースを任せられるとは何て贅沢。

「Daddy, Brother, Lover and Little Boy」

三人の声が揃い、最後の数小節、終わりを惜しむようにギターが、ドラムが一音一音を噛み締め……止まる。

誰も声をあげず、演奏の余韻を匂わせる空気が、密閉されたかのよう固まる。

その中でレインとミヤ、アヤの瞳が僕の目を貫く。

静寂を破ったのは、窓際に降り立った鳥の羽音。

「君が必要だ」

レインはそれだけを言った。

僕は、今の演奏でその言葉の意味を噛み締めていた。

そして、この日フェイスレスの一員となることをきめたのだ。

2-1 precision

「とりあえず、ベースを買いに行こうか」

そう言ったのはミヤだった。

「え、あいつの置いていったのでいいのではない？」

レインがそう返す。

あいつ、と言うのは前のベーシストのことらしい。

アヤが首を傾げるのを見るとどうやら彼女は直接は会っていないらしい。

「因みに、何てベースですか？」

ん、と音楽室の端を顎でさすレイン。

ああ、見覚えがある。

「ヤマハ、アティテュード」

アヤが若干呆れた声音で言う。

「うちは毎回ラストナンバーはあれだからね」

あれか。と思い当たる。

「僕には少々レベルが高いと思うのですが……」

ベース的にも曲的にも。

「最初は60'sスマインド辺りから始めるとして……」

因みに60'sスマインドはベースの和音演奏が印象的なナンバー。

「もっと普通のスケール弾きから始めた方がいいと思う」

アヤがぼつりと言った。

「どうか、個性的過ぎでしょ、入門編には」

ミヤが正論を言う。

ヘッド側に異様にウェイトが行ってる上にチョッパーをやる気ゼロのフロントピックアップとかいろんな意味で個性的。

「最初はジャズベなりプレベなりさ」

ジャズベースとプレシジョンベース。

どちらもフェンダーのベースで、全てのエレクトリックベースの元

となったベースだ。

それもそうか、とレインが頷き、

「じゃ、日曜日の十時駅前集合。いつものところ行こうか」
ベースを買いに行くことになったのだ。

「やあ、来たね」

レインはサングラスを持ち上げて言った。

短い丈の白いジャケットとチェックのスカート。

健康的な太ももが目に入る。

目をそらすと頭ひとつ下にアヤの小柄な体躯。

黒いワンピースに黒いブーツ。

白い肌が浮かぶよう。

「待ちましたか？」

時計を見ると十分前。

「まだ来たばかり」

アヤが細い声で言う。

「ミヤ少し遅れるって」

久々に来た駅なので場所が不安だったのだ。

「どうしますか？」

んー、とレインは唇の下に指を当て、考える。

「とりあえず、マックにでも入ろうか」

駅の横のマックには休日ということもあり、まだ食事時間でもな

いの結構席が埋まっていた。

「コーラを三つ」

適当に飲み物と促されるままフライドポテトを買って三階の、駅

と道がよく見える席に陣取る。

「そういえばレインとアヤはどんな曲を聞くんですか？」

レインはポテトをつまみながらそうだね、とつぶやく。

「お姉ちゃんは意外とヴィジュアル系聞してる」

アヤの奇襲。

真剣にレインは慌てる。

「いやいや、クイーンなんか好きだよ」

それを言ったら、と意地悪い笑みを浮かべるレイン。

「アヤはアニソン聞いてるじゃないか」

「別に、音楽に貴賤はないもん」

少し拗ねるアヤ。

「あとはハードロック系だね」

ミスタービッグだのツェッペリンなどの話で盛り上がる。

「ミヤさんはどんなのを？」

そうたずねるとレインにはやりと笑い、ケータイを取り出す。

「ぼちっとな」

通話ボタンを押した途端、後ろから聞こえてくる音楽。

戦え、何を……

「人生を」

ぼそつとアヤ。

「……筋肉少女帯ですね」

「何がわるい！」

いきなり後ろからトレイでひっぱたかれる。

「痛ッ、何も言ってないですよ」

ミヤが横に座る。

「おまた。何の話してたの？」

レインが説明するとミヤはハンバーガーを口に運びながら笑う。

「ああ、そういう」

というかまだ昼には早いと思うのだが。

朝食？

「いや、間食」

「ミヤさんって意外に健啖家なんですね」

ん？とミヤ。

「つまり大食漢ってことだね」

と、レイン。

「誰が大食漢か！」

「痛い。言ったのはカイリじゃないか」

ぎりり。とミヤ。

「混雑してまいりましたのでお席のご協力を……」
店員の救いの声。

「さて、行きましようか」

「な、逃げたな」

三十六計逃げるになんたら。

そのままトレイを返して外へ逃げるのだった。

「好きなベースリストは？」

広いフロアに所狭しと並べられたベース。

壁の高い所にさえベースが吊り下げられたそこで、レインは急に尋ねる。

「まず間違いなく初心者が聞かれるポイントだね」
だが、とそこでレインは言葉を切る。

「君には単純に好きな音を選んでもらう」
にや、と笑うレイン。

アヤはちよつと手持ち無沙汰。

「ベースはひけないしな」

とミヤと一緒にぼんやりとベースを眺めている。

ベース専門店なのだ。

「でも僕は弾けませんよ？」

そう言うのと心外そうにレインは眉をひそめた。

「何のために私がいるんだ」

ベースも弾けたのか、とちよつと驚く。

「付け焼き刃だがね」

ピック弾きしか出来ないし、と言って店の奥を見るレイン。

「あれ？ 璃那、来てたのか？」

そう言いながら出てきたのは金に染めた髪を後ろでまとめた男。

「今日は客だよ、宇都木」

ふーん。と言って宇都木と呼ばれた男はこっちを見る。

「彼氏？」

「だったらどうだい？」

は？と声が漏れた。

「そんなに否定しなくても良いだろう？」

いや、何も言ってますが。

「今日はこいつのベースを決めに来たんだ」

「ひょっとして俺、邪魔？」

「ああ。ひょっとしなくても」

がっくりと肩を落として去っていく宇都木。

あつという間の出来事だった。

「お姉ちゃんはこの横のギター専門店でバイトしてる」

アヤがぼつりと言う。

「可哀想だなー宇都木くん」

ミヤが言って、店の奥へ入って行く。

「さて、ベース選びを始めようか」

そう言ったレインの手には既にベースが握られている。

「ジャズベ。フェンダーのスタンダードだね。これは62年型のUSピックアップ」

枯れたようないい音がするベースだった。

「宇都木ー、ジャズベの3TSはないの？」

「この前売り切れたー」

残念だな。と頷くレイン。

「あの色が一番好きだったのに」

ま、いいか。とほいと渡された。

「ネック細くて握りやすいだろう？」

確かに手にしっくりくる。

「んで、次。プレベ」

真っ白なボディに黒いピックガード。

あ、見覚えが。

「シド・ビシャス色だね」

「ああ、鈍器ですね」

太くゴリゴリした音がする。

この後もステイングレイだのギブソンだの試したが、結局、この二つに帰ってきた。

「JB62USかPB70USだね」

既に一時間以上が経過していた。

アヤは飽きたらしく持ってきた自分のギターを（ベースアンプで）爪弾き始めた。

「弾きやすさはジャズベースなのですが……」

音はプレシジョンベースのが好きだ。

「なら音で決めた方がいいかな」

けれどジャズベースの音も捨てがたい。

十五分粘り、どうせだから。と教えられたスタンドバイミーなど爪弾きつつ（いつの間にかやら目の前にいたアヤに見つめられながらはやりにくかった）決めた。

「プレシジョンベースにします」

「渋いのだったね」

後ろから声。

肩に手を置かれ、上から覗かれる。

ミヤだ。

「プレベだからって渋いというわけでもないさ」

と言ってレインは宇都木さんと呼ぶ。

「はいはいはい」

奥から出てきた宇都木さんは自分のベースを持っていた。

「そのベースは？」

「これ？アトリエZの……」

「聞いたら駄目だ延々語り続ける」

宇都木さんはがっくりと肩を落とす。

「このベース買う為にここで店員始めたらしいよ」

とはミヤ。

「三十万する。ハンドメイド」

と、アヤ。

「アンプは同じフェンジャパのベースマンクラシックつけて」

「総計はー、って店員に言ってもどうしようもないな」

「ああ、五万で頼むよ」

レインの恐怖の笑み。

「はいはいはいはい」

宇都木さんはもう諦めていた。

「シールドは？」

「モンスターで。L字」

こうして、後々長く使うことになる僕の愛機は決まったのだ。

「思うのですが、これ持ち歩く物じゃありませんよね」
前を歩くレインに言う。

我ながら恨みがましい声である。

「そうかい？ まだ軽い方だと思うけど」

現在、背中には四キロのベース、それになりより十キロのアンプ
を持っている。

「重さよりむしろ大きさが……」

アンプの箱まで含めればもともと膝丈まであるそれは楽勝で座れ
る大きさだ。

歩く度々、足に当たって仕様がな。

「ベース、持つ？」

アヤが少し心配そうに言う。

けれども彼女だってギターを背負っているのだ。

「いや、いいよ。ありがとう」

むしろ弱音を吐いた自身が恥ずかしくなる。

札を言われ、アヤは少し恥ずかしげに首を横に振った。
気にするなって事だろう。

「はーん」

ミヤの悪巧みするような笑み。

「な、何？」

手をわきわきと動かすミヤに迫られアヤが後退る。

「いや、何でも」

言いつつにやにやしているミヤ。

アヤの襟首を掴んで何やらこそそと話をしている。

「置いてくよー？」

前を歩くレインが後ろを振り返る。

尻尾のような髪が遅れて回る。

「はいはい。今行く今行く」

ミヤはアヤを解放するとレインの側まで走っていく。

何の話をしていたのか少し頬を染めていたアヤと視線が合う。さらに真っ赤になって俯くアヤ。

何の話をしていたの？とは聞けなかった。

「ここだ」

そう言ってレインが止まったのは何の変哲も無いビルの前。

よく見れば地下に続く階段とスタジオの文字。

小綺麗なそこを降りると小さな待合室のような所に出る。

「十三時からの……そうそう」

レインが受け付けに行って戻ってくる。

「まだ時間がある。待とうか」

といって、レインは椅子に座ると煙草を取り出して火を着ける。

アヤは少し離れた所に寄りかかり、ミヤはレインの横に座った。かく言う僕はアンプの箱の上に座る。

「何も言わないのだね」

何が？と視線を上げるとレインが煙草を持ち上げている。

「別に、悪い事でもないかと」

人の自由だ、と僕は思う。

「生活委員のくせに」

ミヤが笑う。

そういえばそうだ。

「学校は関係ありませんよ、校内ならともかく」

笑って首を振る。

「そうかい」

レインは笑って灰を落とす。

「君は？」

と尋ねたのはミヤ。

「いえ、吸えませんか」

そんなことをしていると五分前になる。

前のバンドが個室を出てくる。

ベースを持っていてる男に何となく目がいく。

何か既視感のある顔。

レインが目を逸らし、煙草をもみ消す。

その一瞬の瞳に鋭い光の入ったのは気のせいかな。

立ち上がり、今人の出てきたスタジオに入る。

すれ違う一瞬には何もなかった。

やはり気のせいかな。

全員が部屋に入る。

壁の四方の内一つの面が鏡張りで、身長程もあるベースアンプと、胸の辺りまであるギターアンプが二機。

ドラムセットが中央に鎮座し、マイクも用意されている。

「大きい音を出したい時や、録音したい時にここを使う」

ミヤがドカドカとバスドラを踏み鳴らし、アヤがアンプにムスタングを直に繋ぎ、レインはエフェクターを取り出す。

「あ、チューニングしてない」

アヤは言ってシールドを抜いてチューナーに繋ぐ。

自分は、やることのなくなったミヤに教えて貰いながらベースを用意した。

アンペグのアンプにシールドを繋ぐと、ノイズが部屋に満ちる。

恐る恐る弦を爪弾けば低音が腹の底に響く。

「さっきやったスタンドバイミーを弾いてごらん」

言ってレインは漆黒のレスポールをかき鳴らす。

アヤのミュートしたアタック音がカウントを刻む。

「ワン、ツー、スリー、フォー」

ミヤがステイックを打ち鳴らす。

つかえながら弾くスタンドバイミー。

二小節目からアヤのギターがミュートを外し、続いてレインが、ミヤが加わる。

贅沢なスタンドバイミー。

そばにいただけで
こんなにも楽しい事があっただろうか。
汗がベースのボディを濡らし、指が止まる。
顔を上げれば、みんなの笑顔があった。

3-1 AYA

丘に登る。

我らが高校は何故か高台にあるのだ。

まあこの辺りの地形がそうになっているせいだが。

小高い丘を登りきると海が向こうに。

朝の霞に浮かぶビルは向こう岸。

ベースケースのストラップが肩に食い込む。

汗をかきつつも、丘を登りつめ、後は直線道。

朝早い時間なこともあって、朝練の生徒以外、人は見当たらない。

校門の方を見ると、小柄なギターケースを担いだ後ろ姿。

綺麗な黒髪が朝日に艶めいていた。

少し小走りに駆けて追いつく。

「おはよう」

声をかけると後ろを向く。

「あ……おはよ」

はにかみながら挨拶を返すアヤ。

実は同じクラスだったりする。

自分だけ中学が地元じゃなかったのでクラスでもなかなか馴染めず、クラスメートも名すら知らない方が多い。

アヤもなかなか社交的とはいえない性格なので知らなかったのがある。

「悪かったね、社交的じゃなくて」

そう言って唇を尖らすアヤ。

「あれ？口に出てた？」

首を横に振るアヤ。

「よく言われるから」

少し寂しそうな笑み。

儚い、触れたら壊れそうな笑みに少し、手を伸ばしたくなった。

「僕だってそうだ」

何故この時にそんな事を言ったのか。

この時の僕には分からなかった。

アヤの自然な表情を見たのはこれが初めてだったかもしれない。

何となく沈黙が、部室へ向かう自分と、アヤの間にわだかまった。

遠く聞こえる運動部の掛け声さえ、澄んだ朝の空に吸い込まれるような沈黙。

「似たもの同士……かな」

アヤの表情は、その髪に隠れて見えなかった。

朝の静謐な空気。

静謐だと騙されているだけかも知れないけど。

音楽室の防音扉を開くと、雨のように降り注ぐ陽の光の下、レイ
ンがベースを爪弾いていた。

漆黒のボディの見覚えのないベース。

アンプに繋がれていないけれど、微かな弦の音が静寂に響く。

二音を重ねた単和音。 静かな歌。

……光に指があれば心を引きちぎられていただろうに。

彼女の弦を爪弾く指は途中で止まる。

「やあ、おはよう」

レインは笑って言う。

けれどもその笑顔には隠しきれない悲しみが覗く。

それに踏み込む勇気の無い僕は、だから、違う質問をする。

「そのベースは……？」

それに気づかぬレインでもなく、目を細める。

「アリアプロのMAB380。安物さ」

右片手でベースを提げたレインは少し視線を迷わせる。

その視線の先にはアティテュード、あのベースがある気がした。

レインのベースはガンメタルだった。

ソープバー型のピックアップが二つ。

ハムバッキングだろう。

けれどシルエットはプレシジョンベースあるいはジャズベースに
似ている。

「練習するには悪くないベースだよ」

視線を戻してレインは笑う。

さ、練習しようか。

そう言ってレインは立ち上がる。

「ベースも、解る範囲で教えるよ」

そう言ってレインはスタンドにベースを立てかけ、自身のギターを取り出す。

漆黒のレスポールは矢張り彼女によく似合った。

朝の練習を終えて、アヤと教室に入る。

クラスメートの少し驚いた顔。

名前順の席なのでアヤとは離れて座ることになる。

「向坂って結城と仲良かったっけか？」

前の男子が椅子に後ろ向きに座って言うのと、横の男子が追随する。

「そうそう。結城って顔は結構かわいいけど」

なあ。と顔を見合わせる二人。

「なんか近寄りにくくね？」

「中学の時なんか半分くらいしか出席してなかったよな」

何となく、その噂というか取り留めの無い話に苛立ちを感じる。

「この話は止めないか」

自分の思うより冷たい声。

何に苛立っているのだろうか。

クラスメートはぎょつとした顔になってしどろもどろになりつつ

前向きに座り直した。

軽くため息を吐く。

やってしまったかな。

適当に話を合わせておけば良かったか。

いや、けれどそれはできない相談だと、間違い無く思った。

鞆から教科書を出す。

一時限目は数学……

宿題をしていないことに気づく。

「まずいな」

ぼやいてみても始まらない。

矜持から言って気が引けるが背に腹は変えられない。

立ち上がる。

「あ……」

アヤと言いかけて、止める。

「結城」

呼びかけるとアヤは僅かに視線を向ける。

「アヤでいい」

さっきのクラスメートが驚く気配があった。

「じゃあ、僕はカイリなわけだ」

海裡、みのりを読み替えた、特別な名。

「で、何？カイリ？」

自然にそう答えてくれるアヤが、嬉しかった。

「宿題忘れちゃってさ。見せてくれない？」

ん。と肯定に首を縦に振ってアヤは鞆を探る。

ちら、と何か葉がみえた。

「はい」

アヤからプリントを受け取る。

薬の事を聞こうとした時、ちょうどチャイムが鳴る。

この疑問に、後々ああなるとは思ってもみなかったのだ。

まだ数回目の練習の時、レインが言った。

「あ、来週から私とミヤは修学旅行に行くから」

まだ振動を残しているベースのボディを押さえて振動を止める。

「早いですね、修学旅行」

「そうかな、受験にできるだけ当たらないようにって配慮だと思うけど」

ミヤがスティックをジャグリングしながら言う。

「と、言うわけでアヤと君で二人きりなわけだ」

愚妹を頼んだよ。

と言つてにやりとするレイン。

何も言わずスルーするアヤ。

ペットボトルのお茶を飲んでいる。

「あら、面白くないな」

レインがそう言つて苦笑。

漆黒のレスポールをかき鳴らす。

トゥ・ビー・ウィズ・ユーのイントロ。

「何故その曲？」

アヤが深青のムスタングで唱和しながら問う。

「何となく？」

まだアドリブできないし、レパートリーに無いので僕はお手上げ。
その内ミヤもどこかかとバスドラムを鳴らし、入り込む。

ため息ひとつ。

自分には入れない領域だ。

アヤが小さく咳払い。

少しずつスローダウン、フェードアウト。

「はてさて、今日はこれくらいにしようか」
いつもより少し早い。

少し物足りないかな、と思いつつ横目でアヤを見る。
ペットボトルのお茶を空にしていた。

「私達も準備があるからねー」

ミヤが言ってステイックをバックに収める。

スキルの差を実感してきたので自主トレしとかなくては。
そう思いつつベースをケースに入れる。

「それでは、一週間後、ですね」

「ああ、くれぐれも愚妹をよろしくな」

何かくどいな、と思いつつ僕は頷いたのだった。

つまらない授業も終わり、放課後。

いつも通りの詰まらない日常。

中学までの僕はこれが大嫌いだった。

いや、今もか。

目標を見いだせず、どうにも無為に過ごしているようにしか思えない。

けれども、今の僕にはようやく打ち込める物が見つかったのだ。

純白のベースギターは、いまやなくてはならぬ半身。

部室で一人爪弾く内に夢中になっていたらしく、アヤが入ってきたのにすらしばらく気付かなかった。

「珍しいね、僕のが先に来てるって」

アヤはこくりと頷いてギターの準備を始める。

いつも通りの反応。

慣れてきたかなと思ってきた所に拍子抜けだけど。

手慣れた様子でチューニングをするアヤ。

マーシャルアンプに直で繋いだムスタングをアヤは軽く弾く。

手首の運動を済ませるとアヤはこっちを向く。

いつもの、合図。

他の人から始めたのでは僕がついていけないので何となくこのやり方が定着したのだ。

それに、一番レパートリー少ないのも自分だし。

何にするか悩みつつ、ミュートしたままアタック音でテンポを刻む。

まずはやはりこれだろう。

ミュートを外して一音目。

焦らないようにゆっくりと。

スタンドバイミー。

ベースのイントロだけで分かる珍しい曲のひとつ。

音楽を聞かない人でもイントロを聞けば思い出すだろう。

爪弾く指は流れるように。

ベースはドラムと共にリズム隊と呼ばれる。

特に二人きりの場では、ベースが崩れれば演奏はめちゃくちゃになっってしまう。

その難しさを今、実感していた。

目を合わせて、最後数小節。

ベースは同じフレーズの繰り返しだからやりやすい。

音が切れた瞬間に次の曲。

スライドから入る印象的なフレーズ。

パンクの名曲、クラッシュのロンドンコーリング。

ベースラインの印象的なイントロはまた、ベースだけで分かる曲のひとつだ。

テンポキープに必死になりつつ弦を弾く。

駆け足になりつつも必死にもとのテンポに戻す。

手のひらが汗ばむ。

何とか最後まで弾ききる。

繰り返しフレーズは多いものの小指まで使うのでなかなか難しい。

何とか、最後まで駆け抜ける。

けふん。とアヤが咳払い。

ひとつ、目を合わせる。

一拍を空ける。

いつも弾けないながら最後の曲としてやるナンバー。

ボディを叩いて四カウントを取る。

凄まじい速度で叩き付けられる三連譜。

振り落とされないように、暴れ馬の手綱を引き絞る。

けれども置いていかれないように。

疾風のようなイントロを弾ききれば、メロディックなベースラ

イン。

ギターとベースのユニゾンするパート。

互いの楽器が一機のように曲が紡がれる。
一体感。

目が合う。

アヤは、笑っていた。

その自然な笑みを見るのは始めてだった。　今までにない感覚。
ボディを汗に濡らし、弾くベース。

フリーズを勝手に手が奏でる。

疾走する曲が最後の数小節を刻み、名残惜しそうにのばされた一音。

耳が痛いような静寂にホワイトノイズだけが響いた。

こん。

擬音にするならそんな音だろうか。

金属質な音がした。

けれど、それは人の喉が出した音で、次にはギターが、鳴いた。アヤが地面に座り込んでいる。

黒い髪を乱し、咳をなんとか押し殺し。

時折、殺しきれない咳が金属質な音を立てた。

顔色は赤くはなく、熱は無さそうだ。

と、ベースを置き、駆け寄りながらも思った。

ポリリウムを絞っていないベースが鳴く。

とりあえず水の入ったペットボトルを渡すと、アヤは焦点の合わない瞳でそれを受け取る。

息をする度、何か硬いものを引っ搔いたような音がする。

「保健室の先生呼んでくる？」

アヤは苦しそうに喘ぎながら頷く。

僕は動揺しながら、駆け出す。

ベースのシールドコードが足に引っかかりアンプから抜ける。

酷い音が響いた。

リノリウムの廊下を駆ける。

曲がり角で生徒にぶつかりそうになりつつも保健室へ。

気付かない内に切れた息の上、混乱した頭で

「アヤが……音楽室……咳が」

と、文章にならなかったが、保健室の先生は、それだけで理解したらしく、立ち上がった。「音楽部室の結城くんだね」

保健室の先生は二十半ばの齢で、その手の男子には人気の美人だ。白衣を揺らしながら先生は歩く。

「彼女の持病、知ってるかい？」

先生は落ち着いた調子で言う。

「いえ、何かあるんですか？」

できることなら走りたい程焦りながらもその落ち着いた態度に少し、冷静さを取り戻す。

「そう、言っただけだったの」

はあ、と溜め息をついてアップにした髪をがしと掻く先生。
部室の前に着く。

アヤが目線を上げる。

乱れた髪が口の端に張り付いていた。

「白沢、先生」

そういえば、そういう名前だった。

「無理に話さなくてもいいわよ」

そう言って白沢先生はアヤに近づく。

「まったく、無茶をするわね」

アヤがギターのボリウムを絞って、下ろす。

「君、結城くんのカバン取って」

少し戸惑いながら、アヤのカバンを白沢先生に渡す。

「薬は？」

アヤが咳き込みながら首を横に振る。

「ちゃんと飲まないよ」

「薬、嫌いだから」

白沢先生がカバンを渡す。

薬の袋を取り出して、吸入薬を取り出すアヤ。

「ちゃんと周りの人に言って、気をつけてもらいなさい？」

そう言ってこっちを見る白沢先生。

「でも」

「でももしかもないの」

ふう、と溜め息をつく先生。

「君、何て言ったかしら？」

どうやら名前を聞かれているらしい。

「向坂です」

「じゃ、向坂くん、綾ちゃんを送ってあげて」
「アヤの家に？」

意味もなく動揺している自分を自覚した。

「男の子なんだから、ちゃんとエスコートするのよ」

アヤは青白い顔をして突っ込む気力も無い様子。

「分かりました」

とりあえずアンプの電源を落としてベースを片付ける。

アヤの発作も少し収まったらしく、僕がやると言うのを制止して息切れしながらもギターを片付けていた。

「気をつけて帰るのよ」

という先生に頷き、歩き出す。

廊下ですれ違う生徒がアヤの様子に怪訝そうな顔をするのをうざったく思いつつ、昇降口へ。

「家、近いの？」

アヤは弱く首を横に振る。

少し迷って携帯を出してタクシーを呼ぶ。

校門の桜はとくに青々と。

「ギター持つよ」

つらそうなアヤに手を差し出すと、ギターを渡してくれる。

「部屋に置いてきても良かったんじゃないかな」

というと、弱々しくも決然と。

「私のムスタングを置いて行きたくない」

その気持ちは痛い程分かる。

ギタリストにとってのギターはただの楽器の域ではない。

ベーシストのベースもまた然りだ。

タクシーが来る。

僕は前席へ。

時折思い出したように咳き込むアヤを乗せてタクシーは走る。
何とか誘導してもらい、アヤの家の前へ。

着いたのはアパート。

自分が払うと言うのを固辞してアヤが全額出す。

「この五階」

息絶え絶えのアヤが言うが、エレベーターが有るようには見えな
い。

「……階段？」

頷くアヤ。

大丈夫かなと思いつつ、何とか上がる。

膝に手をつき息を整えるアヤ。

鍵を開けて中へ入ると天窓のあるアパートの最上階。

いや、鉄筋だとマンションと言うんだっけ。

ふらふらと部屋に向かうアヤ。

「……お邪魔します」

部屋に入ったアヤの後に続き躊躇いながら入る。

女の子の部屋なんて始めてだ。

いいのかなと思いつながら入る。

ベッドに倒れ込んだアヤ。

床にはヤングギターやギターマガジンが転がっている。

脇のラックにはマンガと文学書が混ざっている。

「ギターどこに置けばいい？」

「ケースから出してスタンドに立てて」

言われた通りにしながらふと思う。

こんなは無防備なのは気を許しているのだろうか。

それとも男として見られてない？

咳き込むアヤ。

いや、氣力が無いというのが一番か。

力のないぼんやりした瞳でアヤが姿勢を変え、座る。

「寝てた方がいいんじゃない？」

「座ってた方が楽」

上着を脱いでリボンを解くアヤ。

その姿にどきつとするのが止められなかった。
少し目を逸らす。

「ご両親は？」

こほ、と少し咳をするアヤ。

薬が効いてきたのか少し落ち着いている。

「父親は居ない。母親は仕事」

「そう」

アヤは少し首を傾げる。

「聞かないんだね」

「聞かれない？」

ううん、と首をふるアヤ。

少し笑う。

「実はお姉ちゃんと私で父親が違うんだ」

秘密を共有する子供のように、笑うアヤ。

それは確かに納得できる話ではあった。

余り似ていないのだ。

漆黒の髪とか、同じ所もあるけれど。

そんなことを考えると、また少し意識してしまう。

「それじゃ、僕はもう行くね」

アヤが少し寂しそうな目をするけれど、それを口に出せる程、それに応える程、僕らには勇気がなかった。

4-1 MIYA

「送り狼したって？」

ミヤのその言葉に僕は飲んでいたお茶を盛大に吹いた。

「うわ、きたなっ」

ミヤにちよっとかかったようだけどそれより。

「んなっ、なんで知って、じゃなくてそんな事してません！」
にやりと笑うミヤ。

「そんなに必死になると余計あやしいぞ。カイリくん？」

面白がっている。絶対面白がってるぞこの人。

「別に何もありませんしたってば」

がちやり。と部室のドアが開かれる。

「なにやら楽しそうだね」

といいながら入ってきたのはレイン。

その後ろについてるのはアヤ。

「もう大丈夫なの？」

あの後アヤは週末まで学校には来なかったのだ。

「うん」

小さく、少し恥ずかしそうに頷くアヤ。

にやにやするミヤは見ないふり。

「迷惑をかけたね」

レインがそう言って定位置につく。

「ちょっと危ないかな、と思ってたんだ」

ちら、とアヤを見るレイン。

「今回みたいな無理はしないようにね」

「そうそう。昔から喘息なのに無茶するから」

とはミヤ。

「というか自分で気づかないんだよねコンディション」

そうか、喘息だったのか、と少し納得。

二人の間で縮こまったアヤは視線が合うと恥ずかしげに目をそらした。

「んじゃ、久々にやろうか」

レインがレスポールを取り出す。

「カイリも個人練習だけでつまらなかっただろう？」

意味ありげに視線を投げるレイン。

「じゃ、行くよ」

ミヤがカウントをとる。

「一発目から」

レインが言う。

カウントが切れると同時に叩きつける三連譜。

けれど何故だろう。

アヤと合わせたあの日の感覚は、まだ遠かった。

「それじゃ、また明日」

分かれ道で、レインは言う。

アヤは何か言いたそうだったけれども目線が合うとふい、と踵を返す。

「またあしたー」

と僕の横で手を振るのはミヤ。

ミヤの帰り道はまだ一緒の方向。

「さて、と」

「？」

ミヤは腰に手を当て、人差し指を僕の鼻先に突き出す。
何？

「ちょっと付き合いなよ、後輩」

というと僕の手を取ってずかずかと歩き出す。

連れて行かれたのは某有名ファストフード。

おごるよ、と言うミヤにジュースだけ頼んで卓につく。

「んでさ、アヤちゃんとはほんとに何もなかったの？」

ため息をつかせてもらう。

なんかしつこくないかな、この話題。

「何もありませんでしたよ」

「ふーん、そう」

何か思うところがありそうに茶色の前髪を弄るミヤ。

「ま、いいか。んで本題」

今までの本題じゃ無かったのか。

悪気のない笑顔を見てると突っ込み難い。

「どうだった？ 奇しくも個人練習になったわけだけど」

何を言ってるんだか、と思うところだろう。

けれども、彼女は全て知っているようだった。

「そのレベルには無いとは分かっているのですが」と、臆病な僕は予防線を張る。

「何を練習すれば上手くなれるか分かりません」

皆と一緒にやっているときは楽しくてしょうがないのだが、一人アンプの前でやっているとしてもそんな気持ちを抱くのだ。

「不安なわけだ」

ハンバーガーを食べながらミヤはにっこりと笑う。

ちなみに間食らしい。

細いとは言わないが無駄の無いこの体のいったい何処にそれだけ入るのだから。

「目つきがやらしいぞ、カイリくん」

ミヤがじろりと見てくる。

「誤解です!？」

慌てる僕。

「はは、冗談だよ」

空になったトレイで頭をはたかれる。

「いいところ、連れてってあげる」

そう言って立ち上がるミヤ。

僕は急いでジュースを飲み干して追いかけなきゃいけなかった。

着いたのは小さな楽器店。

街中にあるレインのバイト先とは全然雰囲気が違う。

「タマちゃん、いらっしやい」

小狭いスペースにはギターが並び、少ないながらベースも並んでいる。

暖色系のライトに照らされたそれらの共通点は、古い。だろうか。

「タマちゃんってのはやめてくれないかな、叔父さん」

恥ずかしそうに頭を掻くミヤ。

「後ろのは彼氏？」

「違います」

「早いよカイリくん!？」

は、つい。

「私ってそんな魅力ないかな、叔父さん」

「いやいや、当たった男が悪かったただけだって」

ざっ、と店内のギターを見ると、ただ古いだけに留まらず、どうやらヴィンテージの域に入るものもあるようだ。

「ここは、私の叔父さんが経営するリペアショップなんだ」

六十年代後半の物というジャズベースを見つめているとミヤが寄ってきて言う。

「リペアショップ？」

「そう。調整やパーツの交換、はたまたフレットを抜いたりとか」なるほど、そういう店もあるのか。

「叔父さん、スタジオ借りて良い？」

「勿論」

ミヤが鍵を受けとり、僕に歩くよう促す。

気づかなかったが階段が店の奥にあった。

「防音が完璧じゃないんだけど、宣伝にもなるからって貸してくれ

るんだ」

そう言って笑うミヤ。

「それに、家でやるわけにもいかないしね」

ドアを開けるミヤの顔は窺えなかった。

重い防音扉を開くと、ドラムセットを中心にアンプに囲まれたそこは二、三人入るのがやっと。

「いつも、ここで練習してたんですか？」

「そういうこと」

ドラムセットの脇に掛けられていたスティックを取り、回転させるミヤ。

「さ、やろうか」

また練習か、と少しげんなり。

やっている間はいいのだが、ぶっ通しで数時間やると疲労の波が来るのだ。

「個人練習はよくやったでしょ？」

そう言ってスティックを叩きつける。

ドラムだけで音楽を奏でるような音の連鎖。

「スキルがあっても、私達リズム隊がばらばらじゃ意味ないならね」
僕がベースを取り出す間、どすどすとバスドラムを踏み鳴らしていた。

「さ、行くよ」

セッションなどと言うものは出来ないので自然、いつものレパートリーになる。

ベースを爪弾く。

ドラムに耳を澄ませ。

ふと気づく。

ギターを含む四人でやる練習とは勝手が違う。

僕が出る所では巧妙に引き、僕が引くと、良いオカズを入れてくる。

リズムキープに収まらないミヤのプレイを押さえ込んだり込まれ

たり。

譜面を睨んでいては分からないニュアンスがすんなりと頭に入ってくる。

ベースとドラムは同じリズム隊。

その意味を痛感する練習だった。

汗とハイハットの輝きの中に、ミヤは、居た。

僕が疲れきって指を止めると、スタジオに満ちていた音が引いていく。

ミヤのハイハットの音が名残惜しそうに響き、やがてそれも消えると静寂が場を満たした。

夢中になって弾き続け、指弾きした右指が、スライドを多用した左指が、痛い。

なんとなく、汗で髪の毛張り付いたミヤの顔が直視できなかった。そのどうだ、といわんばかりの口元は見えただけ。

「どうだ」

ニヤニヤと笑ったミヤは本当にそう言う。

僕は何も答えられず、ベースを肩から下ろす。

「楽しかったでしょ？」

頷くしかない。

それに、とても有意義だ。

ミヤはタオルを取り出して、汗を拭いている。

「思ったより時間経ってるな」

ミヤはそう言って立ち上がると、帰ろっか、と言って立ち上がる。店を出て、歩く間も僕の指に、体に刻まれたビートが心地よく響いていた。

ミヤの家の前につく。

「それじゃ、また明日、だね」

とミヤが笑って言ったときだった。

「珠希はまだかえらねえのか！」

ミヤの家からそんな怒鳴り声が聞こえた。

ミヤの、いつもの、場を和ませる笑みが強張った。

「じゃ」

それだけ言うと家に向かうミヤ。

まるで後ろめたい事を見られたかのように。

その背中に、僕は言わなくてはならない事を思い出す。

「……ミヤ」

なんと呼ぶか迷って、けれどその呼び方で呼び止める。

「なに？」

ミヤは振り返る。

「ありがとうございます」

一瞬首を傾げ、そのあといつもの笑みを浮かべる。

「過去形にするにはまだ早いぞ」

そしてフェイスレスを結ぶ、名を呼ぶ。

「カイリ」

少しでも恥ずかしそうにミヤは言う、背を向けて家の中へと消えていった。

僕も、少しでも立ち止まった後に家路へとつく。

アヤとミヤとそれにレイン。

何時の間にか、僕には失いたくない物ができていた。

漠然とした、理由というものが。

5-1 practice

「ライブを、やろう」

僕はレインのその言葉に反応できずベースを取り落とす。

「久しぶりだね」

ミヤが笑って言う。

アヤはと見ると、僕と同じような反応をしていた。

「前までのオリジナルのレパトリーはこなせるようになったし」
そう言ってレインは僕とアヤを交互に見る。

「ライブをやらないのは、損だ」

ニヤリと笑うレイン。

新曲も一曲くらい欲しいな。

などと呟いている。

「……いつ？」

アヤが困惑気味な顔で尋ねる。

「二ヶ月後、だね」

レインが顎に人差し指を当てて。

「土曜、だね」

あっ、と言う間だったな。と現実逃避。

「そのためには」

皆の視線が僕に集まる。

「ですよ」

ぼそりとい、ぼやく。

「特訓。かな」

ミヤが真顔で言うので、かなり恐い。

「そうだね、フェイスレス流スパルタ特訓……」

レインが意地悪く笑う。

「……冗談だよ」

そんな顔するな、と肩を叩かれる。

そんな酷い顔してたのかな。

「ギターが二人いるんだからミスター・ビッグみたいにお姉ちゃんがカイリの後ろから……」

ミスター・ビッグのライブで、ビリー・シーンの後ろから手を回して、ボーカルのパットがベースを弾くシーンがあったのだ。

そのアヤの発言にレインが僕の後ろから手を伸ばすのを考える。

「……顔、赤いよ？」

ニヤニヤするミヤ。

あれは後ろから抱きつくようなものだ。

「どうかしたのかい」

レインが明らかに分かっている表情で僕の肩に顎を乗せる。

本格的にベースが手から滑り、ストラップが肩に食い込んで何とか止まる。

そうこうしてる内にその日の練習は終わった。

ライブまで後2ヶ月。

夢のような話だった。

サビに向けて一気に高音まで駆け上がる。

張り直したロトサウンドの弦が指に食いつく。

柔らかいローズウッド、高いフレット。

握り馴れたネックを絞り上げる。

ベースを傾け、一気に……

サビに入ろうとすると、ピンからストラップが脱落する。

「おわっ」

危うく落ちそうになったベースを、何とか左手でネックを握りしめこらえる。

みんなが急に途絶えたベースのビートに何事か、とこっちを見る。

「ああ、ストラップが外れたか」

レインが言って、近づいてくる。

アヤはアームを使ったせいですれたチューニングを直していた。

「ロックピンに交換したらどうだい？」

初めて聞く言葉に首を傾げると、ミヤが助け舟を出してくれる。

「ストラップをベース本体にがちり固定できるピンだよ」

引っ掛けるだけでなく、固定できるらしい。

「使い易くするためには手段を尽くさなくてはね」

そう言って近くに寄ってきたアヤのムスタングを指す。

「ペグはゴトーのマグナムロック、ナットはオイルボーンに交換済みだ」

「全部アーム使った時のチューニングのずれを減らすため」

アヤはそう言うのアーム上下に動かす。

そしてハーモニクス音。

やっぱりチューニングは少しずれてる。

「これでもまだ、かなり良くなってるの」

ムスタングのじゃじゃ馬っぷりはなかなか消えないらしい。

「善は急げ、だ」
僕は半ば引きずられるようにレインについていった。

「ちーっす」

ミヤが言いながら先に入る。
いつものベース専門店。

いつもと違うのは、激しいビートが満ちている事。
店内を見ると、宇都木さんがベースを弾いていた。
親指ではじき、人差し指で引っ張る。
サムピング、プリング。

俗に言うスラップ奏法というやつだ。
アトリエZのベースが、激しく唸る。
高音の強い音が、たたみかける。
まるでベースではないような音。
店内に入ると、ふつと止まる。

「おっと、いらっしゃい」

金に染め、後ろに束ねた髪が汗で張り付いている。
青いバンダナを外して、巻き直す。

「相変わらずだね」

レインがいささか呆れたように言う。

「まさか平日この時間に客が来るとは思ってなかったのさ」
宇都木さんはうそぶいてアトリエZをスタンドに立てる。
その横にはスティングレイ。

「久々じゃん、そのベース」

ミヤがスティングレイを指して言う。

「スラップの宿命だね」

スティングレイと言えばスラップと言うほどのベースだ。
「最初買ったのがこいつだったのが運のつきさ」
と宇都木さん。

アトリエZもまた、スラップのベースだ。

個人的には指弾きしたときの音が好きなんだけど。

「で、今日は？」

「こいつのベースのピンをロックピンにして欲しいんだ」
ロックピンね。と宇都木さんがメモ。

「色は？」

急に話を振られ反応が遅れる。

「えーと、シルバーで」

「はいはい。了解」

すぐ終わるから。

宇都木さんが僕のプレベを持って奥に引っ込む。

「しかし、出費が痛いです」

ロックピンで数千円飛ぶのだ。

「仕方ないよ」

と言ったのはアヤ。

彼女が言うのと、確かに。としか言えない。
操作性のために万単位でかけているのだから。

「私もフロントをハムバッカーにしようかな」

charがそんなカスタムにしていた気がする。
けれど、

「僕は今のアヤの音が好きだけど」

少しアヤが頬を赤く染める。

「そう？」

「あー、カイリがアヤちゃんに告白してるー」

にやにやしながらミヤがアヤにしなだれかかる。

いやまて、何か変な事いったぞ。

「なッ……違いますよ」

「お、動揺してる」

私の時は即答だったのに。

ミヤが明らかに分かってる顔で笑う。

「私の時？」

「聞き捨てならないな」

レインまで入ってくる。

「聞いてよ、カイリってばさ……」

追及をかわしたり、誤解を解きにドタバタして、みんなであーわーやってると、作業を終えた宇都木さんが呆れた顔をして出てくる。

けれど話を聞くと笑って僕の肩を叩き、話の輪に加わる。

僕は翻弄されながら、不思議と嫌な気分ではなかった。

「久々!」

ミヤがそう言って真っ先に飛び込む。
貸しスタジオである。

小綺麗で、しかし四人で入るには狭い小部屋。

「久々に大音量でできるな」

レインはにやりと笑ってギグケースからレスポールを取り出す。
部屋には流石に無い、アンペグを見て、僕も何だかんだうきうき
としている。

「お姉ちゃんはいつでも大音量だと思う……」

アヤもムスタングを手早くチューニング。

短い間に随分と使ったプレベを労るように触れながら、ペグを回
してチューナーで調弦。

一瞬、かくつと遊びがあるので、ちょっと回すのに癖がある。

どすどす。と、ミヤがお気に入りのパールの赤いバスドラを踏み
鳴らす。

僕はグラフィコライザの使い方がいまいち分からないので、イコ
ライジングのボタンを押す。

アンペグは便利。

「さてさて、みんな準備はいいかな」

アヤはそのまま直で繋ぐので、早くに終わっている。

軽く弦を爪弾く。

腹に響く重低音。

「オーケー、です」

満足気に頷くレイン。

振られるサイドポニー。

「ワン、ツー、スリー、フォー!」

ミヤがスティックを打ち鳴らし、カウントを数え、

雪崩込むサウンド。

ほとんど即興で叩きつけ合う、レインのレスポールとアヤのムスタング。

きらきらとしたサウンドが飛び抜けて走り出したと思えば、歪んだサウンドがその喉元に食いつく。

決まったコードを維持してプレベを爪弾く。

ドラム、ミヤと目配せしてスピードを上げる。

その土台の上で二つのギターは踊り回る。

駆け抜けて倒れ込んで、一瞬の空白。

再度ミヤがスティックを打ち鳴らす。

抑えられたバッキングのムスタングの上を、レインのボーカルが歩く。

空白の間に、ピックアップのセレクトと、トーンの絞りをしている。

常時トーンを全開にしている僕とは大違い。

好きなサウンドで曲をやるのが一番。とはレインの言。

歌が切れる。

叩きつける。

ほとんどプリングのように力強く弦を弾く。

ピックが二対のギター弦をかき鳴らす。

ハイハットが煌めく。

高く高く、音がぶつかり合う。

音が切れた時、その空白が耳に痛かった。

6-1 he

煙草で一服。

レインは煙を吐き出す。

さり気なく銘柄を見るとウィンストン。

僕はコーヒーを飲み、アヤはアイスココアのストローをくわえては放しを繰り返している。

相変わらずのミヤはサンドイッチを食べ、傍らにはギターが二つにベースが一つ。

スタジオの近くのカフェである。

薄暗い照明と味のある調度が良い感じ。

コーヒーの味も、良く分からない自分でも分かるくらい良い。

レインがマンデリンをすすり、皆何も言うでも無くくつろいでいる。

というか、疲れているのだけけど。

「つくかくれした」

サンドイッチを平らげてミヤが机に突っ伏した。

バンドで一番運動量が多いのは文句なしにドラマーだろう。

ライブでのレインのアクションも凄いけど。

「カイリのベースには色気が欲しいね」

「ウエノコウジさんみたいにですか？」

アヤが少し吹き出す。

実はアヤって笑い上戸だと思う。

「確かにセクシーだけどそれは違うね」

僕の尊敬するベーシストの一人である。

プレベをピックで弾き倒すストレートなプレイスタイルには憧れる。

「そういえばアイツもどっちかって言うところ系だったね」
とミヤが潰れたまま言う。

アイツとは僕の前のベーシストを指すらしい。

「技巧には飽きたって言ってたね」

その結果が置き去りになった音楽室のアティテュードか。

話を切るようにジッポーで煙草に火を灯すレイン。

おっと、失言。とミヤは口を閉ざす。

僕はつとレインの横顔を見る。

アイツと呼ばれている彼とレインはどんな関係だったのだろう。

煙草をふかす彼女の横顔からは何も分らなかった。

手狭なスタジオ、リペアショップの二階。

汗と煙草の匂いの混じるそこで、ミヤは言った。

「アイツの話、聞きたい？」

一度連れてこられてから定例となった金曜のリズム隊練習。

汗をタオルで拭いているミヤの言葉に一瞬反応できなかった。

アイツ、という言葉に昔のベースか、と気付いて、ようやく僕は首を縦に振った。

「私が会ったのはフェイスレスに入ってからなのだけど」

と、ミヤは前置きしてから話し出した。

▽

レインがバンドに入ったのは、中学二年生のころだった。

それまでは独りギターを手に練習を重ねるストイックなギター少女だったらしい。

同じ小中学で、一番仲の良い友達だったのだけど。

とミヤは友達の後に？が着くように言った。

ともあれ、そのバンドはハードロックが主体のバンドで、その中に居たのが当時中学三年生だったアイツことユーキだったらしい。

ユーキ以外のメンバーは二十を越えたバンドマンで、自然レインはユーキと親しくなったのだろう。

そもそも、バンドに入るきっかけを作ったのはユーキだった。

レインがギターを弾けるという話を聞きつけたユーキが下級生の教室にいきなり入ってきたらしい。

そのバンドは急なメンバー脱退によりギターとベースを募集していた。

ライブハウスで数回そのバンドのライブを聞き、端から目を付けていたユーキがレインと共に加入したのだ。

ユーキは始めからベースであったわけではないらしい。

「今レインの使っている黒いレスポールカスタムあるでしょう？あれ、元はユーキのギターなんだ」

昔のレインは楽器屋で叩き売りされていたシーンのテレキャスターカスタム、つまりはアベフトシモデルを使っていた。

「ユーキも昔はプレベつかってたんだよ」

62年モデルリイシュー。

あるいはレインに合わせたのかもしれない。

ミッシェルの構成だ。

ユーキとレインはどんどん腕を上げていった。

「私がドラム始めたのは、そのバンドのライブを見てから」

そしてバンドは、レインが高校に入るころ、突如解散する。

それを機に、ミヤを含めた三人で軽音楽同好会を設立。

「同じ高校に入るのはつらかったよ。頭的にね」

その時にベースに専念する事に決めたユーキはアティテュードを手に入れる。

「何で“不信”なんてバンド名にしたんだろうね」

レインはその時にレスポールカスタムを手にした。

そしてユーキが高校を卒業する時、フェイスレス脱退を口にしたのだ。

▽

「ユーキとレインの関係は何だったのだろうね」

ミヤは伸びをして言った。

「あと、ユーキの影響で煙草始めたらしいんだよね」

彼が吸っていたのがウイinstonらしい。

前にミヤが彼の話を出したのは偶々ではなかったのだ。

「レインいつもはケントだもん」

とミヤ。

「この話は秘密だよ」

いつものようにミヤは悪戯気な笑顔で言ったのだ。

それは本当に偶然だった。

いつもの楽器屋とは違う所で教習本を探す。

いつもの所はベースの品揃えはいいのだが、如何せん書籍が少ない。

「コードだけ見て、アレンジを決めろとはなかなか難しいことを言うよなあ」

つい、ぼやく。

それが当たり前とは言え、初めて数ヶ月の自分には荷が重い……。

「いや、やってみせるさ」

嘯く。

足を引つ張るわけには、いかないだろう。

ベースラインの本と作曲の本を見繕って、レジから離れた時だった。

後のことを考えて、悩んでいたのが悪かった……いや、良かったのかも知れない。

肩がぶつかる。

持っていた本が地面に落ちる。

「あ、すみません」

ぶつかった相手が謝る。

僕の肩くらいまでの身長。

ウェーブのかかった栗色の髪。

ロングスカートがよく似合った、落ち着いた女性だった。

僕が呆けている間に彼女が本を拾い上げてくれる。

「はい。バンドやってるんだ？」

開いてしまった紙袋の中身を見て微笑む彼女。

齡は二十前半、という所か。

「あ、はい」

本を受け取る。

「ありがとうございます」

買った本を見ただけで分かるってことはこの人も？

「これも何かの縁かな、よければ見てよ」

名刺入れから取り出された一枚の深い青のカード。

受け取ると、真ん中にホームページのURLだけが書かれている。

「あ」

何かに気づいたかのように顔を上げる彼女。

「じゃ、私は行くね」

頑張れ、少年。

そういつて軽く拳で胸を突かれた。

何故か、彼女とはこれで最後とは思えなかった。

店の外へと走っていく彼女。

その先にはライダーズジャケットを着た、黒ずくめの男性。

逆光でよく見えなかったが彼女と二言三言話したあと此方を向い

て少し微笑んだように見えた。

“pulse”

それが彼女達のバンドの名前だった。

サンプル楽曲を聞いてみると、想像していたよりもハードなロックが流れる。

見た目で勝手にポップスだと思っていたのが、どちらかといえばパンク。

けれどもそのスキルは確かで、切り裂くようなボーカルに合わせてられるベースは隙を見てはフィルインを入れ、ギターはダウンピッキング主体ながら時折鋭いカッティングを見せる。

パンクではない。

けれどその根底にそんなものを感じるサウンドだ。

いつの間にか夢中で聞いていた。

ため息を一つ吐いてヘッドフォンを置く。

パソコンの画面には彼等のサイト。

楽器屋で見た男性はどうやらベーシストのようだ。

ダブルのライダースを着て、サンバーストのプレベを提げた姿は渋いクールさを感じさせる。

あの女性はやはりロングスカートで、緩やかにウェーブした髪も合わせて清楚な印象。

その姿からは想像できない鋭い声で歌う。

そしてフェンダージャガーを提げたギタリスト。

皮肉気な笑顔のよく似合った、如何にも、なバンドマン。

そしてドラム。何か諦観したような虚空を見る目が印象的。

黄昏色とフェンスの背景がよく似合うバンドだった。

ふと気になってライブの日時へと画面をスクロール。

そして気付く。

この日時は、僕らのライブの日ではないか。……この人達と対

バンするのか？

僕はまた、ボーカルとギターとベースとドラムがぶつかり合い、戦うサウンドへと沈みこむ。

「pulseってバンド、知っていますか？」

ベース専門店。

宇都木さんにそう話を切り出すと、彼は自身の手にあったアトリエZを取り落としそうになる。

「なんでまたそのバンドを知っているんだね、ミノリくん？」

少し焦ったかのような宇都木さんにこの前の本屋での出来事を話すと、なんとも言えない表情をする。

「偶然ねえ」

考えるように顎に手を当て唸り、頭をがじがじと掻く。

金色に染めてまとめた髪が二、三本ほつれた。

「この辺じゃ、まあ有名所だね、インディーズのレーベルにも話が来るとか」

んで、何が聞きたい？

片手間に軽くスラップ練習をしながら尋ねる宇都木さん。

そう。僕は彼にスラップ奏法を習っていたのだ。

お陰で指には血豆が出来たけど。

「いや、今度対バンするみたいなので」

ふーん。とチューニングの狂った弦のペグをラフに巻く宇都木さん。

「どうでもいいけど璃那にはその話しない方がいいぜ」

何故か、と尋ねようとした時宇都木さんはぎょっとした顔をする。

「私がどうかしたって？」

背中にかかる僅かな重み。

上から聞こえた声。

紛れもなく、レインだ。

「ミノリも来てるなら言ってくればいいのに」
見下ろす視線。

鋭い眼差し。不敵に笑む口元。

横のギター専門店の前掛けを付けているからにはバイトの日なのだろう。

というか、僅かに伝わる体温にドキドキする。

「ん？もしかして宇都木にスラップでも習っていたのかな」

僕の右手を握りつつ笑うレイン。

「あ、いや、その」

なんか恥ずかしくて知られたくなかったのに。

「一曲目か、あれは別にオクターブで弾くだけだから別にスラップじゃなくてもいいのに」

と言って、宇都木さんのベースを取って弾き始めるレイン。

「ほらね」

とベースを渡してくるレイン。

ナチュラルフィニッシュのボディ。

細いネックは握りやすい。

じゃ、なくて。

「俺のアトリエZ……」

宇都木さんのジト目に気圧される。

「しかし、大丈夫かい？」

レインは僕の右手を見て言う。

指弾きとスラップで使う二本の指は血豆が出来ているので酷く使いにくい。

かと言ってテーピングするわけにいかないしなあ。

「ピック弾きの練習だと思えば、まあ」

色々ピックを試すきっかけにはなった。

「私は、君の指弾きが好きだけだね」

どきり、とした。

僕は血の上った顔を隠すため、手許に目を落とす。

あのバンドの事は、結局聞けなかった。

7-1 KAIRI

眠れない夜に、私はふとベランダへ出た。

身を切るような風に、身を締めつつ。

いくら暖かくなつたとはいえ、深夜は冷える。

片手に提げた深い青のムスタングを爪弾く。

夜明けに向かう歌。

ブラックバード。

何とはなしに彼の事を思いながら。

私の爪弾く旋律に、いつの間にか静かな、悲しげな歌が付く。

後ろを振り返れば、そこにお姉ちゃんがいた。

きつと、ギターの音で目が覚めてしまったのだろう。

いや、それだけではないかも知れない。

もの悲しげで、前向きなブラックバードのさえずり。

私達は二人して、夜明けを告げる深い青の空を眺めていた。

「おはようございます」

そう控えめに言う彼に挨拶を返す。

ちよっと肩に手を回すと、顔を赤らめ、少し体を引いた。表情は変わらないが、わかりやすいものだ。

「どうだい？ ベースの調子は」

彼の手元を見るふりをして、少し体をよせる。

彼は恥ずかしがり屋な所がある。

これは解消しないと、ライブの時大変だと思うのだが。

正直、私もどきっとしない訳ではない。

流石は男の子。といった所か。

すこし角張った体のラインが服越しに伝わる。

それを見るアヤとミヤの目が別々に冷たい。

「レイン。セクハラ禁止」

カイリ、困ってるよ。

と言ったのはミヤ。

「嫉妬かい？ 君だってカイリと二人きりでスタジオ入っている癖に」
狼狽するカイリ。

アヤは驚いたように、珍しく目を見開いた。

「知ってるくせに」

ミヤが呟いて膨れる。

そう、どちらかと言えばそれはカイリに対する嫉妬なのだろう。

最近はそうでもなくなってきたけど。

裾をそっと引っ張るアヤに分かったよ、と頷いてカイリから体を離す。

矢張り私はカイリにあいつを重ねているのだろうか。

いや、それだけではないと言える。

カイリのベースは決してうまくはないけれど矢張りこの音でなけ

れば、今のフェイスレスは無いだろう。

私達のベースストでないと。

カイリの奏でる、トーンを全て切った暖かい音が響く。

目立たないけれど、心地いい。

カイリに良くあった音だった。

つまらない授業。

つまらない人達。

そう思っていた。

そっと目を黒板から離してカイリを見る。

部室で言っていたミヤと一緒に練習しているというのはどういう事なのだろう。

その言葉が、私の胸に重いしこりのように残っていた。

どれくらいぼんやりとしていたのだろう。

いつの間にか時計の長針は五十分を指し、授業は終わっていた。

カイリは組んだ腕の上に頭を乗せ、すっかり睡眠モード。

私はと言えば、部室での発言の意味を尋ねることも出来ずに、足をぷらぷらと振るだけ。

授業中に書いた落書きに線を足していくとどこかカイリに似てきた。

一番見てきた人にどうしても絵が似てくるのだ。

美術で自画像を書けば自分の顔に。

そして今は、カイリに。

いつ、この短い間に私にとってカイリは大きな存在になっていたのか。

すやすやと眠るカイリの顔を見る。

その男性にしては長い睫毛が伏せられて、いつもの微笑みが無い顔にどきりとした。

ああ、何故だろう。

つまらない筈の学校でこんなにも胸が高鳴るのは。

ただ一人のクラスメートの行動に、気持ちが揺らぐのは。

何故なのだろうか。

アヤちゃん不機嫌だなあ。

ドラムセットの裏側からそっと盗み見る。

レインがまだ来てないから、みんな別々の練習をしているのだけど、さっきからカイリくんとアヤちゃんは一言も話していない。

いつもならどちらかが何かしら話しかけるのだけど。

あるいはどちらも話し掛けようとして話題が出ず、なんともむず痒い微笑ましい状況になるのだが。

やっぱ朝のレインの一言かなあ。

「あゝ」

伸びをして、背中の筋肉を伸ばす。

「ほら、二人とも、一緒にセッションしよ」

適当にドラムにスティックを打ちつける。

「E、メジャー」

しばらくしてアヤちゃんが呟いて、青のムスタングにピックを振り下ろす。

キラキラと、高くて、切れのいいギターのライン。

アヤちゃんの言葉に軽く頷いて、カイリくん……いや、カイリもその純白のベースに指を這わせる。

トーンを切った甘い音。

ギターの高音に対して絶対に噛みつかない。

そんな音。

適当にオカズを入れてやると、ギターが、次いでベースが、と返してくる。

なかなかみんな息が合ってきた。

ギターが踊るのを支えるベース。

やっぱり、この二人の音は合ってるな、と笑ってしまう。

見れば、カイリもアヤちゃんも僅かに微笑んでいた。

二人な僅かに目を合わせると、私のフィルの後、珍しくギターが引いた。

それに対してベースがフレーズを揺らす。

そしてギターがそれに対し、同じフレーズを。

何度かそれを繰り返した後、私は終わりのフィルを鳴らす。

うん。この二人は大丈夫だ。

汗を拭き二人に笑いかけると、二人も笑みを返す。

言葉は、いらなかった。

ぼんやりとした朝。

パソコンの前でコーヒーなんて飲んでみる。

私は紅茶党なのだけど、これはあの人の趣味。

だから、カップの中のコーヒーはもう温もりを失っていた。

脇のベースに手を這わせる。

黄ばんだ白のベース。

湿った空気が部屋に流れる。

彼がシャワーから上がってきたみたいだ。

「ねえ」

私が背中越しに声を掛けると彼が軽く振り向く気配。

板張りの床が少し、ぎしりと鳴った。

「この前の本屋の彼、昔のあなたに似てない？」

「何をまた」

振り向けば上半身裸でタオルを掛けただけの彼が自分のコーヒー

を注いでいた。

湿った髪が張り付いた頬。

寝不足でちよつとついた隈。

ちよつとごつめな顔。

太い腕。

改めて見るとどきりとしてしまう。

いつもは眼鏡を掛けている目は、細められて鋭く、けれどどこか

涼やか。

諦念を感じさせる雰囲気は齢に見合わない。

「無精髭剃って、もう少し健康的にしたら似てるとおもうんだよね」

彼はコーヒーを一口すすり、熱さに眉を顰めた。

「髪型が似てるのは認めるが」

そういつて長めのストレートの髪を弄る彼。

セツトしないでいいその髪がうらやましい。

ケアしなくても綺麗だし。

私が膨れているのに気付いたか、笑いながら彼は頭を撫でてくる。それが嫌ではないから逆に複雑な気分になるのだ。

やがて彼は煙草に火をつけ吸い始める。

髪に匂いがかからないようにと、わざわざ私から離れて。

何があの本屋の少年に似ているかって、やっぱりそれは雰囲気だ
と思う。

何か落ち着いたような、内に秘めたような、逆に不安定のような。
朝は少しずつ過ぎていく。

窓の外の空には烏が数羽飛んでいた。

8-1 faithles

遂に、ライブが翌日に控えた。

まだ練習出来たのではないか、妥協があつたのではないか、固くなつた右手の指を見ながら考える。

部室の中で、白いプレベのボディを撫でる。

部屋の奥では弦についた汗をクロスで拭くレインとアヤ。

前日は、演目を全部流すだけで終わった

ぼんやりと二人を眺めていると、ミヤが隣に座る。

「緊張してるね？」

タオルを首に掛けて顔をのぞき込んでくるミヤ。

その手にはスティックケースが下がっている。

自前のドラムセットを持たないミヤは、スティック以外に持つものが無いので、もうやる事がないのだ。

やがてムスタングを入れたケースを抱え、アヤが隣に座る。

「弦はいつ替えた？」

「二週間前」

ベースの弦はギターのそれと違って、ある程度使ったものでないと音が落ち着かないのだ。

高音が大きく出るばかりで、低音の抑えが小さくなる。

それに、ギターと違ってそうそう切れたりしない。

「今度のハコは慣れたとこだから、ドラムにも問題ないし」

バスが響く感じだから気をつけないとね。

そう言ってミヤは笑い。

「マーシャルは別に借りなきゃ」

アヤはいつも通りの調子。

「さて、諸君」

レインはレスポールをすっかり仕舞い込んで、皆に向き直る。

「今回は」

頑張ろう。とかそういう事を言うのかな。

ベースのネックを軽く握る。

「楽しもう」

レインは笑って、言った。

今まで、修行僧のように、ライブをこなしていた彼女が。

僕が今まで見てきたフェイスレスのライブはとてつもなく張り詰めた空気で、楽しんでいる、とは思えなかったのだ。

その彼女が、今、笑って言った。

「このメンバーなら、やりたいことができる」

全員を見渡して、彼女は言うのだ。

「ありがとう」

と。

そして、当日。

久々に母親と朝食を食べて、ベースを担ぐ。

今まで共に練習を続けてきたそれは、ずっしりと肩に食い込む重さを返してくる。

けれどもそれは頼もしい重さ。

心臓は、既に十六ビートを刻むよう。

昨日までは現実感が希薄だったけれど、今更ながらに実感がふつふつと沸いてくる。

固くなった右手の人差し指と中指を、親指で軽くなぞる。

まず向かう先は、ライブハウス……ではない。

いつも使っているスタジオ。

一時間だけ借りたそこで、今日の演目を一通しする。

ルーズリーフに書かれたセットリストをもう一回見て、ベースを担ぎなおし、歩く。

朝の日差しの中で見る、いつもの街。

シャッターの落ちた店。

何かいつもとは違って見えた。

「カイリ」

急に肩を叩かれて驚く。

見れば、アヤがムスタングのソフトケースを担ぎ、エフエクター類の入った鞆を持って立っていた。

駆けてきたらしく、息を切らせている。

「おはよう、大丈夫？」

言ってから大丈夫？は無いな。と思う。

「うん」

アヤは頷く。

少し向こうにレインの姿。

一緒に歩いてきたのだろう。

それなら、そのまま合流すれば良かったのに。
そう思った時に、息を整えたアヤは言う。

「カイリは何でうちのバンドを続けているの？」

質問の意図が分からなかった。

「それは……」

「あ、いや、私は、カイリが居た方がいいし、けして悪い意味じゃないんだけど」

いや、カイリは居なきゃいけないと言うか居て欲しいと言うか。
そんな事を言いつつ、何か考えるアヤ。

レインはもう少し向こう。

「えーと、カイリがあれだけ頑張って、ついて来た理由、かな」
僕は、その問いに、咄嗟に返そうとして言葉に詰まる。

レインへの憧れ？アヤやミヤへの友情？

フェイストレスが好きだから？

本当にそれだけ？

アヤの投げた一石は、思ったよりも重かった。

重い扉を開くと、さして広くはない部屋に出る。

奥は一段高くなっていて、ドラムセットやアンプがその空間の半分近くを占領している。

「おはようございまーす」

ミヤが率先して挨拶をすると、既に着いていた他のバンドのメンバーや、スタッフの人が挨拶を返してくれる。

最後のバンドが来るのを待ちつつ、ざっと周りを見る。

思い思いの服装。

思い思いの曲なのだろう。

ガチガチのパンクらしい人も見える。

その中に見知った顔を見つけた。

pulseの、メンバー。

目が合う。

ボーカルの彼女は、ひらひらと手を振ってくれる。

近付こうとして、ただならぬ視線を感じた。

後ろから。

レイン。だった。

振り向き、その視線を辿ればその先にpulseのベース。

「カイリ」

そのレインの声はさながら地を這う蛇。

「彼らとは知り合い？」

余りのレインの気迫に首を縦にも横にも振れないまま固まる。

「バックステージパス配りまーす」

最後のバンドが到着したらしく、スタッフさんの声が響いた。

レインは少し何か問いた気そうな顔をして、しかし何も聞かずにバックステージパスを受け取りに行った。

「彼がユウキだよ」

ミヤの言葉に、愕然とした。

順番が発表された。

当日に発表するのは目当てのバンドだけ見て帰る人を多少なりとも減らすためらしい。

フェイスレスが最初。

pulseが、最後。

僕らが最初に持ってこられたのは、やはり僕とアヤの加入の変化が気になったかららしい。

「音源良かったよ、ちょっと方向変わったね」

とレインとミヤとは顔なじみらしいPAさんは言ってたけど。

他のバンドはこのライブハウスの常連らしく、慣れた様子だった。

「今回は逆リハだから順番は最後だ」

レインが言う。

逆リハーサル、という制度が良く分からなかったが、要は最後の方から順にリハーサルをするという事らしい。

最後という事は、一時間四十分くらい暇。

狭い控え室の中でベースを弾くのも辛いし、チューニングだけ済まして脇のスタンドに立てかける。

数本用のそれには深いブルーのムスタングと漆黒のレスポールが既に並んでいる。

「さて、外の空気でも吸いにいこっか」

ミヤが伸びをして言う。

「え、でも」

と、アヤ。

他のバンドの曲も聞きたい、ということだろう。

僕も聞きたいところだけど。

リハーサルが始まったらしく、ステージの音が控え室にまで響いてくる。

腹にまで響く低音。

艶っぽいミドルの、ギター。

しばらく何か考えているような顔をしてリハーサルの音を聞いていたレインが控え室の出口へ向かう。

慌てて、僕も立ち上がる。

控え室のドアを開くと、更に大きな音で聞こえる音楽。

逆リハだから pulse が一番最初なのだ。

今更、ミヤの意図に気付いた。

ステージに立つユウキを見る。

サンバーストのプレベをかき鳴らす彼。

届かないレベル。

いつの間にか側に立っていたアヤに袖を引かれる。

「大丈夫」

大音量の中で声は聞こえなかったけど、そう言ったように見えた。

先に行ったレインとミヤを追って、地上へ。

昼の太陽が眩しい。

「煙草、吸うかい？」

煙草を吸いながら、勧めてくるレインに断ろうかとも思ったけど、何となく受け取ってしまう。

初めて吸う煙草は、嫌に落ち着く味がした。

そして

いよいよ、本番。

防音扉を開いて、ステージに出る。

スタンドに立てかけられた僕のベースが、一番奥で待っていた。逆リハだったから準備は要らない。

震える足に力を入れてベースを担ぎ、一度振り返る。

アヤ、ミヤ、レイン。

三人の顔を見る。

レインは目を閉じ、漆黒のレスポールを構えマイクの前へ。

ミヤは軽くウイंकを返し、

アヤは僕の目を見て、頷いた。

ライトはステージに向かっているために客席は殆ど見えない。僅かに数人、以前のフェイスレスのライブで見た顔が近くに。

後は表情の見えぬ観客が、後ろに。

意を決し、前を向く。

ミヤがスティックを投げ上げる気配。

そして、破裂した。

ミヤの揺るがないビートに合わせて自在に身を捻る、地を這うようなレインのギター。

心地よくカッティングをかき鳴らすアヤのバックینگ。

僕は、ついていけなかった。

いつもは自然に動く指が、固まる。

音と音が途切れる。

左手のミスにつられ、右手の二本の指が絡まるかの如く。

イントロが終わり、歌へ。

単純なルート弾きに指が動かない。

走るライン。

手許しか見てなかった、一人焦る僕に正気を戻させたのは、ミヤのドラムでも無く、レインのかき鳴らすレスポールでもなく。

メインギターへと移ったアヤのムスタング。

本来ならメロディーを追うそれが、バッキングを奏でている。

歯切れの良い、高音の強いカッティング。

気付けば皆が僕のリズムに合わせてやんわりとテンポをずらし、合わせていた。

目があったアヤは少し、笑った。

間奏に入り、レインは後ろを、僕を見る。

そのまま頭の後ろでギターを奏でつつ、その顔は笑っていた。

ミヤがドラムの叩き方を変えた。

合わせやすいように、リフを減らしてまで。

僕は、一人でやっているのではない。

フェイスレスの一部なんだと。

四人が一つなんだと。

そう気付いた時に、

僅かな涙が瞳を湿らした。

いよいよ、最後の曲となる。

レインのハスキーな声が消え、照明が落ちる。

僅かな時間を置いて、客席から拍手。

真っ暗な闇。

でも、レインが笑っているのは、何故か分かった。

そして、ここからがボーナストラック。

僕とアヤが前に出て、マイクの前へ。

再度点灯する照明。

客席は逆光で見えないけど、僅かにどよめく声。

ニヤリとレインが笑って、ピックを頭上に掲げる。

天に、掲げる。

そして、振り下ろす。

ツインギターが絡み合い高みへと登って行く。

ベースの僕は、おいて行かれないように全力でついていく。

ミヤのドラムはタイトに、負けじとビートを刻む。

叩きつけるかのように刻まれるリフ。

そして、一度立ち止まる。

そこから展開する曲。

ベースはスウィングせずタイトにブルーススケールを刻む。

そして、歌い出す、アヤ。

“ 気が大きくなった金曜日 ”

始まる、コロラドブルドック。

照明に当たったアヤの綺麗なソプラノ。

輝いているように見えた。

メインギターに戻ったレインは、活き活きとリフをかき混ぜて、奏でる。

僕が、初めて聞いた、今のフェイスレスの曲。

ツインギターの贅沢なエディション。

二人のプレイを邪魔しないように、僕は低音を支える。

そして、サビへ。

僕もマイクに噛みつく。

“コロラド・ブルドック”

“すっかり夜に酔っちゃった”

僕とアヤが歌う。

レインはミヤに向かって、ギターをかき鳴らした。

“俺はふらふら、床に転がっている”

アヤが少し引き、僕が歌う。

みんな、笑っていた。

そして全員でサビを歌った後に、お互いが戦うようなイントロへと入る。

ギターとギター、ベース、ドラムが叩きつけあう。

本来のメタルのようなあの曲とは離れた、僕らのコロラドブルドック。

そして、二人で歌う、裏切られた男の三番。

全員で歌う最後のサビ。

そして、なだれ込むアウトロ。

楽しかった。

ただとにかく。

この時間を終わらせたくなかった。

アウトロは、終わらない。

四人の視線が、中央で交差する。

みんなが、笑っていた。

レインの歪んだギターは複雑なリフを刻み、アヤの澄んだギターは繊細なリフを刻む。

ミヤのパワフルなドラムは、けれども技術に裏打ちされたもの。

ああ、僕はみんな好きだ。

知らず、笑顔になっていた僕に優しく笑いかける三人。

目の前が歪んで、何かと思ったら、涙だった。

よかった。

幾つかの偶然が重なって今居るここだけど、僕はここに居れてよかった。

名残惜しげに、最後の一音が奏でられ、今度こそ、照明が落ちた。そして、僕らの初めてのライブは終わった。

9-1 faithless

僕は、屋上でぼんやりとしていた。

朝の冷たい空気。

給水塔に寄りかかり。

ライブをしてから二日。

まだ、あの時の熱が手に残っているようで、自分の右手を見下ろして苦笑する。

随分弾き倒して指先は固くなっているつもりだったけどライブで必要以上に力が入っていたようで、指先に僅かに血豆が出来ていた。

「フェイスレス」

急に呼びかけるような声がして、顔を上げる。

「何故、我々がそう名乗っているのか解るかい？」

レインが、立っていた。

冷たい風に髪をなびかせ、それに負けぬ冷たい美貌で。

フェイスレス……不誠実とか信用の無い、といった意味。

そういえば、その理由を聞いた事はなかった。

僕が考えている内にレインは傍にきていた。

向かい合って、吐息すらかかる位置で。

圧倒されて、動けなくなる。

「何故、最後の曲がコロラドブルドックなのか」

その怜悯な瞳の奥の、燃える焰に気付く。

「何故？」

呟くように答えた僕の声は朝の空気に散る。

レインはくすり、と嗤い、口許を僅かに歪めた。

「いつ、裏切られてもいいように」

更に距離は縮まる。

唇が触れそうな所まで。

ほんの少しだけ僕よりも低い背丈で、踵を浮かし。

余りに存在感のある彼女なので、僕よりも大きいと思っていた。
その僅かな発見に、僕は何故か動揺していた。

「もし、私がここで、愛の告白をしたらそれは同じ所へ立った仲間としての裏切りにならないかい？」

小さく、潜められた声。

頬に当たる吐息。

その言葉に喜び、胸を高鳴らせながら、何故僕は焦っているのだろう。

自分の気持ちの相反する思いに口を開けず、止まる。

レインは答えを待つかのように動かない。

暫くの空白。

緊迫した空気。

そして、ようやく僕が口を開いた時。

レインの肩越しに、アヤが見えた。

彼女は驚きに目を見開き、ぬばたま色の黒髪をなびかせ、走り去る。

「……ごめんなさい」

僕はそれだけを、凍り付いた肺から絞り出し、レインの横を駆ける。

気付いたのだ、自身の心に。

一心不乱に駆ける。

アヤを追って。

「振られちゃったね」

ミヤが話かけてくる。

背後に立った彼女に、答える事もなく、私は煙草を取り出す。

口にそれをくわえた所で、後ろから抱きしめるように手が回される。

その手にはライターが握られている。

頬に僅かに髪の毛の感触。

有り難くその火を使わせてもらう。

同じようにフィリップモリスをくわえたミヤが言う。

「フェイスレスの失恋担当だもんね」

レインは。

そう言って笑うミヤ。

ユウキくんといいさ。

と続ける。

「ユウキは違う、奴はただの従兄だ」

失礼な事にミヤは笑う。

「そういう事にしといたげる」 少し、大人気なくも腹が立った。

「まあ、おまえの恋は成就しようがないけどな」

少しだけ、廻された腕に力が籠もった。

「酷いなーそういうこと言うんだ」

少しだけ拗ねたような声。

背中に感じていた熱が離れる気配。

「私はずっと好きだからね」

リナ。

そう言い残して、ミヤは降りて行く。

タバコを投げ捨て。

私は一人、心中に合わない真っ青な空を見上げた。

吸い込んだ煙は、いつもより苦い気がした。

10 the end?

屋上から階段を降りる最中に、声が聞こえた。

「待って!」

カイリの物だ。

上に残してきたレインの事が頭をよぎる。

息を殺して、会話に耳を傾ける。

「何で? 口封じ?」

「違うんだ、さっきのは……」

おお修羅場つてると内心にやにやる。

「違うって、何が? だってカイリはお姉ちゃんが好きなんでしょう?」

「そうだけど、でも」

「でも?」

おお歯痒い。

「アヤの方が好きだ」

言った! いささか声が大きすぎるような気がするけど。

少ないとはいえ生徒は居ますよ?

「ほら、アヤのギターの音の方が僕好みだし……」

ずっこけた。

物理的に。

「この甲斐性無しめ……」

つい呟く。

そっと覗いてみると、顔を赤くしたアヤちゃんが身を翻したところだった。

「……勘違いだったのはわかった」

まあ、そうだよな。

こんな甲斐性無しだもんね。

「私も、カイリのベース好きだよ」

小さく消えるような声で、アヤちゃんが言っで、去る。

カイリも暫く立ちすくみ、やがて、追うようにして去る。

「レイン。まだ可能性は残ったよ……」

私は、ようやく降りてきたレインにそう言うので精一杯だった。精神的に。

もうすぐ、夏が来る。

身を焦がし、燃える夏が。

僕達がどこまで行けるか分からない。

でも、みんなで何処までも行きたい。

アヤとレインとミヤと。

四人ならば、何処までも行ける気がした。

そんな、季節のお話。

あとがき

フェイストレス。

これにて終了です。

長かった。

故に終わってしまうと寂しいものですね。

ライブのように。

最初は、自分のバンド意欲を盛り上げるために書き始めたものでした。

いつの間にか、それには収まらないようになって……

反省点としてはやっぱり自分は人の心情変化を書くのが苦手ですね。いつカイリくんがアヤちゃんに惚れたかーとかその逆とか、ね。

もし、もしも意見、反響があればフラグ回収の為に外伝的な物を書くかも知れません。

パルスとかユウキくんの話とかね。

宇都木さんの話とか。

カイアヤのアフターとか。

甘さがあまり無かったし。

良ければ感想を！

また、お会いしましょう。

次の話はファンタジーかファッションパンクな女の子の話かの予定です。

5/20 誤字脱字修正

フェイストレス・アンコールロッキンを次書きます。

一応フェイストレス・ロッケンロールとは別枠で。

短編集となる予定です。

先ずはカイアヤアフターから。

いつ出来るか分からないけれども。

かみんぐすーん！　　そういえばフェイスレスを書いてる最中に気付いた事があるんですよ。

……レスポールとムスタングって、けいおん！じゃね？

冷や汗たたりでしたね。

フェイスレス・アンコールロックン更新しました。

一話はカイアアアフターです。

砂を吐きながら書きました。

二話はミヤの話の予定です。　　三話はギャグでした。

久々に。



さて、自分のちょっとした夢は、同人でも良いから本を一冊、作る事です。

フェイスレスは思い入れの深い作品なので、（始めて完結させられた作品なのです）勢いで書いた分をしっかりと煮詰め直し、加筆修正して文庫サイズの本にしたいのですが、もしそうなったとして、幾人の人を買って頂けるか、そこが不安になるのです。

物を形にした途端、その辺りが難しくなるのがままならない所ですネ。

もし、買うよ、という人が自分の予想以上にいらっしゃったら本当に出すかも知れません。

というか夢なので出します。

ライトノベル調にイラストも入れたいですねー

夢は割れない風船です。

膨らみ続け、空に飛ぶかは解りません。

中に詰まった物と風の助けが必要デス。

あいうおんちゅー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9834g/>

フェイスレス・ロッケンロール

2010年10月9日22時55分発行